

魂

dyopan

老人の命は今にも消えそうだった。

ひとり部屋の中、ベッドの上に横たわっていた。

あと幾呼吸すれば老人は死にいたるだろう。老人自身、死がもう寸前まできていると予感しているためか、静かな面持ちである。

だが次の瞬間には老人の荘厳な表情も乱れた。

廊下の方からばたばた騒がしい音が聞こえ、すぐさま部屋のドアが開かれた。年十二、三ほどの少年が姿を現した。

「じいちゃん！」

老人からの返事はなかった。

「じんちゃん！ 死にしまったか！」

少年の声は大きい。それに部屋の中でやけに響く声だった。

老人の眉はわずかに動いた。少年はそれを見逃さなかった。

「じいちゃん！ まだ死んでなかったみたいだね！」

老人は苛立った。静かに死を迎えたいというのに、なんなんだ！ この感情は老人の命をかつと燃え上がらせた。かと思うと燃え尽きた。

老人は息をひきとった。

少年は数分たたずみ、テーブルの水差しを飲ませようとしたところ老人の死に気づいた。

「じいちゃん！」

少年は何度も老人に呼びかけ、必死に肩をゆすぶった。

少年にゆすぶられるたび老人の口はだんだんと開かれ、みっともない表情に近づいた。

老人の死は依然としてゆるぎない。少年は老人の命を呼びもどさんとばかりに老人の肩をゆすぶるだけでなく、顔じゅうをビンタしたり、体のあちこちをつねったり、くすぐったりした。

それでも老人は目覚めなかった。

少年は泣きそうになった。老人の死がいよいよ確かに感じられたからだった。

ここで奇妙なことが起きた。これには少年の流しかけた涙もひっこんだ。老人の大きく開いた口から煙のような妙な青白い空気の塊が出てきた。

少年は目をみはった。呆然としたままそれを眺めていた。

ふいに少年は、老人の口から立ち上っているものが魂であると直感した。少年は青白い気体をつかもうとしてみた。なんと、つかめた！

少年はつかんだものを、口の中へ押し戻し、老人の頭とあごを押さえ、口を閉めた。

三分が経過した。老人は起きない。少年が揺り動かしても起きない。そのうち、ふたたび老人の口はだらしなく開いた。

少年は老人の口の中を覗き込んだ。暗くって、先ほどでてきた不可解な魂らしきものは見当たらない。

少年に謎が残った。